ニューギニア・還らざる兵士

「戦死」の疑惑を追って

草賀類子

ギニアの疑惑を追って
帰らざる兵士

草賀類子

〈検印省略〉

ニューギニア・還らざる兵士

昭和五十八年八月十五日　第一刷発行

定価　一二〇〇円

著者　草賀類子
発行者　石川晴彦
発行所　株式会社主婦の友社
東京都千代田区神田駿河台一―六
電話／二九四―一一一一（大代表）
郵便番号／一〇一
振替／東京二―一八〇番
印刷所　大日本印刷株式会社

もし落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

©Ruiko Kusaka 1983 Printed in Japan
ISBN4-07-919080-8

目次

序文

家永三郎——5

東部五十五部隊の青春　金澤公男——8

詩

くさか類子詩集「個の旅人」より——11

あの人——11

兵隊のほね——18

序章　戦死への疑惑——23

遺体も遺品も確認されない「戦死」報告——24

独立自動車第三十九大隊　第一中隊少尉（戦死後中尉）　崎田章夫　行年二十三歳二カ月——42

独立自動車第三十九大隊と第一中隊行動概要について——46

第二部　崎田少尉にパラオで逢った——53

目撃者たち——54

失われた報道の良心——69

第三部　縺(もつ)れた糸——79

〝豪兵（オーストラリア兵）スキヤキ事件〟——80

戦死者名簿の謎？——99

第二中隊長の推理——112

第四部　死亡確認書を書いた人は？——115

偽名の死亡証明書——オーストラリア・カウラ捕虜収容所——116

元副官・母袋忠右衛門氏に聞く——126

第五部　再び「戦死公報」をめぐって——135

ウエワク、ハンサ間での崎田少尉〝戦死〟は考えられない——136

崎田少尉は単身、コシヤコシヤまで来た？——142

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第六部　骨と皮の敗兵十万人のコシヤコシヤ——153

軍隊とは名のみ、弱肉強食の修羅場——154
小便を飲み、蛆虫を食って敗退——159
半死半生の兵から靴を奪う——161
飢餓と病魔の戦場にコックリさん流行——163
飢餓の極限、人肉を食う——164
部下を食う某大学医学部教授——166
〝豪兵（オーストラリア兵）スキヤキ事件〟——166
軍刀のこと——170
爆撃後の死体確認は難しい——170
遺骨——171
ニューギニアの残存者——172
白骨から憤怒の火柱——172
上級将校の長靴——174
拾われた遺骨にしがみついて還って来た霊魂——175

第七部　崎田少尉は三度死んだ？——179

戦死の公報とは何だったのか——180

因縁の島・ニューギニア——185
詩　くさか類子——194
螢幻——194
櫛——199
まんじゅしゃげ——203
ニューギニアのジオラマ——206
終章　戦争のために生命を捨てたすべての人たちへ——215
著者略歴——229
ニューギニアについて、主な参考資料——229

装幀　杉山久仁彦

序文

家永三郎

十五年にわたる未曾有の戦禍をもたらした戦争が終ってから、すでに三十八年の歳月を経た。もはや戦争を全く知らない世代が人口の過半数を占めるにいたり、「太平洋戦争って何？」「どこと戦争したの？」「どっちが勝ったの？」という質問をする女子大生の存在さえ報道される時勢となった。それにもかかわらず、日本国憲法の前文にいう「戦争の惨禍」の爪あとはまだいたるところにのこっており、肉体の傷痕あるいは精神のいたでに苦しみ続けている人々が少くないことも事実である。原爆症に呻吟する人々、空襲で肉体の一部を永久にもぎとられた人々、戦場の極限状態において発狂してついに快癒しなかった人々、あるいは最愛の夫・父・恋人等を戦場に送り出したまま永久に再会の機を失い、今日なお哀別離苦の念を忘れることのできない人々、戦場で無辜の良民を虐殺し良心の痛みを胸に秘め続けている人々、そのような人々が年ごとに地上から減っていきつつあるとはいえ、今はまだ相当数生存していることも事実である。あと二十年か三十年を経過すれば、戦争体験者はことごとく姿を消し、全く戦争体験のない世代のみの時代が来るであろう。

あのいたましい体験、その不幸をふたたびくり返させないためにも、老いゆく戦争体験世代と若い戦争非体験世代とが共存している今日こそ、戦争体験を客観化して次の世代に遺産

として伝えることの可能な最後の時期ではないかと思われる。戦争により終生かき消すことのできない心のいたでを負うた著者のこの労作は、そのような試みとして実に貴い努力の結晶と思う。

ここには、非人間的な極致に達した戦場での思い出を語ることの苦渋と、それをしもあえて忍んで語られた、二度と聞き得ない証言とが、あわせ記述されている。そして著者の求めていた目的はついに達せられなかった。戦後三十八年の時間をもってしても、戦争によって負わされた心のいたでのいやされることの如何に困難であるかを、何よりも明白に証拠だてるものではあるまいか。

戦火の中を紙一重の差で幸にも生残り（死にそこない）七十歳に近い馬齢を重ねてきた私にとり、この一書を感情を平らかにして読むことができない。しかし、戦争を知らない世代はどのような反応を示すであろうか。それを不安に思えばこそ、いっそうこのような戦前・戦中世代の怨念の深さを、戦後世代に少しでも理解してほしいという念のいよいよ切なるを覚える。著者の請に応じてあらずもがなの一文を草して贈るゆえんである。

（歴史学・中央大学教授）

東部五十五部隊の青春

金澤公男

毎朝バス停へいそぐ山路に、今年も辛夷の枝頭がふくらんで、筆の穂のような苞ができ、やがて木蓮に似た白い花が咲いて、……とみているうちに、鮮やかな新緑に変った。信濃も奥のわが地方では、それも五月中頃のことである。

辛夷の花を見ると、くさかさんのことを思い浮べる。くさかさんの鋭利な詩には、いつもグサリと刺される思いを味わっている私なのだが、まだじかにはおめにかかる機会が持てないでいる。そのくさかさんを、この花にむすびつけるものは、戦友の崎田とのかかわりからで、崎田の〝思われ人〟がくさかさんであることを知った十年ほど前——彼がくさかさんを〝辛夷の君〟とうたいあげていたことを知った時からであった。

私は昭和十七年二月一日、金沢市の十一屋町にあった東部五十五部隊第三中隊(大南隊)に入隊した。太平洋戦争勃発で卒業をくり上げられ、十二月末に急遽卒業試験ということで、いわば学徒動員のはしりであった。

入隊したらその幹部候補生隊に崎田や下田公安が、同じ内務班にいたわけである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

当時の軍隊、とくに初年兵にとって、それがいかに人間性否定のラーゲルにも等しいものであるかは、文字では充分に語りえないものがある。僅かに野間宏の「真空地帯」がその片鱗を伝えてくれる。

その暗黒の日々の中で、ひそかにしめやかに愛を育みそだてた崎田は、類まれな仕合せな男だったと思う。初年兵の頃とちがって、甲種幹部候補生になった頃から、彼の表情がいきいきと変ってきたのを感じたが、くさかさんとのロマンは、多分、その頃に芽生えたのであろうか……。

崎田は世渡りのきわめて不器用な男だった。

野卑な班付一等兵や上等兵、そして班長の下士官のごきげんをとることの、まことに下手な男であった。その点共通していた私は、妙に崎田に親近感を抱いたのも、軍隊という特殊環境のせいだったと思う。このように愚直なのを、軍隊用語で〝ポス〟と軽べつしたが、崎田も私もポスの部類に属していたようである。

くさかさんの感性は、このようなポスの中に人間性の真実を見出し、また崎田の隠れた詩性に共感を覚えたのかも知れない……。

くさかさんは、崎田と訣れて四十年の想いを、沢山の詩や短歌や随想にうたいあげている。それらはいずれも珠玉の作品といえるが、例えば詩集「個の旅人」における〝九谷帯留〟の十篇は、クリスタルな愛の純粋結晶ともいうべき絶唱である。就中「野村練兵場」には、崎田の実在感がそくそくとして迫ってくるものがあり、コワイくらいだ……私はくりかえしくりかえし、倦むことを知らずこれを誦し、私たちの青春と運命の酷烈さにおもいを馳せるのである。

崎田はこの世にいない。

彼はニューギニアの戦線へ、私はインパール作戦へと袂を分かったのが最後のわかれであった。

彼がハンサからコシヤコシヤへ、そして消息を絶った。その戦死の虚像を正そうと、くさかさんは執拗に求めつづけてやまなかった。そのドキュメントたる本書が語りつづけてやまぬ「愛と死」は、永遠の平和への憧れともうけとられるであろう。

（経済学・信州大学教授）

くさか類子詩集「個の旅人（りょじん）」より

あの人

だれか
あの人をしりませんか

一九四三年の八月
東部五五部隊にいた
見習士官の腕章をつけ
関の孫六の軍刀を大事そうに
寺町の坂を下りて

酒蔵のある御所町を
白いワンピースの少女とあるいていった

夕やけの
才田のながい径

「きっと　かえって来る」

と　いったあの人

ふるような　銀河空の

香林坊の小さな喫茶店で
クライスラーの〝愛の哀しみ〟を
少女(おとめ)におしえていった人を

無表情で　無口で
唇もとにさびしい翳(かげ)をのこし
笑うとあどけない顔になった
太眉をかくした戦闘帽からのぞく眼が
少年のように純粋だった

酒も烟草ものまないで

フィドルを弾いていた
軍隊でも暇さえあれば
ハーモニカを吹いたという
十八番は
〃誰れか故郷を憶わざる〃だった

小隊長とは　まやかしの
牛や馬と同じように船に積みこまれ
鉄砲玉のかわりに
その年の八月二十四日
宇品の港からつれていかれた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com